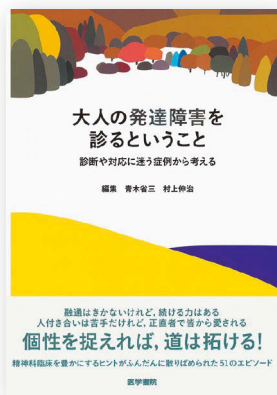


#書評



日々の診療に役立つ だけではない、 大胆な問題提起の書

評者 福田正人
群馬大学大学院教授・神経精神医学



大人の発達障害を 診るということ

診断や対応に迷う症例から考える

青木省三、村上伸治＝編
定価 3,300 円(本体 3,000 円＋税 10%)
A5 判・304 頁／医学書院／2015
[ISBN 978-4-260-02201-9]

「200 頁以上の症例集部分は退屈するのでは…?」、そうした予想はすぐに裏切られた。「ああ、やはりこう考えていいんだ」、読みながら繰り返しそう思い、「どのくらいの精神科医が同じように考えるだろうか」、読み終えた今、そう考えている。学会でたまたまお目にかかった編者の青木先生は、「まだ証拠もない仮説の段階ですから」と謙遜しておられたが、臨床実感に根ざした確かな見方である。

「発達障害ではないと思っていた自分の患者の数%が、いや数十%が実は発達障害特性をもっている」と考えるようになった編者は、「発達障害徴候がそこそこあるが、発達障害と診断してよいのかどうか迷う“白でも黒でもない灰色”に位置する人たち」を主な対象とした適切な書籍がないことに気づく。そこで、川崎医科大学精神科の仲間と自らの経験に基づき症例集を編むことになった。

中心は、51 症例からなる第 2 章である。統合失調症、アルコール依存症、難治性うつ病、境界性パーソナリティ障害と一応の診断名がついている場合もあるが、「こだわりエネルギー」「心配の暴走状態」「急性期なのに笑顔で穏やか?」というタイトルから、臨床で出会うさまざまな症例が取り上げられていることがわかる。診療の経過に添えて、「どう考えたか」という臨場コメントがあり、「考察」で一般化される。

豊富な症例についての経験のまとめが、編者による第 1 章と第 3 章である。そこには、「大人の発達障害」の診察と支援について、臨床家に役立つ知恵が印象的なキーフレーズとして散りばめられている。たとえば、「発達障害は生活障害である」「発達障害的な特徴がいくらかあるために、適応障害になってしまったのだと理解できる事例が非常に多い」「発達障害特性は、その人にかかるストレスによって、強く現れたり逆に見えにくくなったりする」「精神症状が急速に表れ消退する、人や場面によって異なって表れてくる」「『積み上げ』が起きにくい」「『リセット』がある」。

支援についての心得は、「正確なコミュニケーションを心がけるのが基本」という指摘から始まり、「発達障害の人は、人を求めている」「すべての灰色事例の人が必要としているのは『人生の解説者』『人生のガイド役』、指導者よりも解説者」「『困ったら相談する人』『困らなくても何かと相談する人』になってもらう」「周囲の人と『助け合う人生』、助け合えば薄まる」と続く。

こうした発達障害についての広い捉え方が導くのは、「発達障害の傾向をもつ人の診療は、これまでの診療と基本的に変わらない」「『本人の特性に合った対応』は精神科臨床のすべての基本である。発達障害臨床こそが精神科臨床の基本である」ことへの気づきであり、「発達障害臨床の最終目標は、その人の個性や持ち味が認められ、凸凹が許容される生きやすい社会の実現である」という信念である。

日々の発達障害の診療に役立つだけでなく、「人を見る際の視野を、定型発達から発達障害へ広げ」ることで、「これまでの成人精神医学に大幅な変更を求める」大胆な問題提起の書でもある。人の心について、心と言葉の関係について、そして発達障害とはどういうことなのかについて、考えを新たにし議論を深めるために多くの精神科医に手に取っていただきたい。「ウラがなくオモテだけで生きている人がもつ透明感」を「純度の高い人として尊敬」する、それが編者お二方の姿勢である。

G